令和５年度　「青少年の家」不登校対策事業
第５回ふれあいキャンプ　事業報告

1 趣　旨

不登校傾向にある児童生徒の活動意欲、コミュニケーション力、自己肯定感の向上と社会的自立を図るため、自然体験や宿泊体験等不登校の状態に応じた多様な体験活動の機会の提供と相談対応を行うとともに年間を通じた居場所を構築する。

（SDGsとの関連）

4　質の高い教育をみんなに

10　人や国の不平等をなくそう

15陸の豊かさも守ろう

17　パートナーシップで目標を達成しよう

2 主　催　大分県教育委員会

3 実施期日　令和5年11月25日（土）～26日（日）

4 実施場所　大分県立香々地の青少年の家

5 参加者数　33名（児童生徒　9名、保護者5名、メンタルフレンド等19名）

6 支 援 者　大分大学福祉健康科学部学生（メンタルフレンド）

7 日程・プログラム

11月25日（土）

時刻	活　動　内　容
13:00	受　付
13:20	出会いのつどい（アイスブレーキング）
14:30	活動1「自然で遊ぼう」（選択制） ① 森のゆうえんち （ブルーシート滑り台、MTB体験スラックライン、創作活動ロープアスレチック等） ② 海釣り体験
16:30	のんびりタイム（選択活動）
18:00	夕　食
19:30	活動2「スウェーデントーチ体験」 【保護者懇談会　～20:30】
20:30	入浴（メンタルフレンド会議）
21:30	就寝準備
22:00	就　寝

11月26日（日）

時刻	活　動　内　容
6:30	起床、洗面
7:30	朝　食
8:40	部屋点検
9:00	のんびりタイム（選択活動）
10:00	活動3「かかぢ屋台村」 ※屋台グルメを作って昼食として食べます。
12:30	別れのつどい
13:00	解散

（1）出会いのつどい（視聴覚室）

・参加者や大学生ボランティア（以下、メンタルフレンドという）、職員等が最初に出会う場として設定した。
・受付場所にメンタルフレンドを配置し、参加者を会場まで案内する等、緊張を和らげるための工夫をした。
・アイスブレイクとして、メンタルフレンドにはキャンプネームの紹介や冬にまつわるエピソードを一人ずつ紹介してもらった。

（2）活動1「自然で遊ぼう（選択制）」

① 海釣り体験（香々地新波止）
・初心者でも簡単に魚釣りができるように事前に仕掛けを準備し、行った。すべての参加者が魚を釣ることはできなかったが、魚が見える場所に移動したり、釣り方を工夫したりする姿が見られ、全員時間いっぱい熱心に取り組む様子が見られた。。
・魚釣りをしながら、メンタルフレンドと会話を楽しむ様子も見られ、交流を深める時間にもなった。

② 森で遊ぼう
・火起こし体験（ファイヤースターター）、たき火体験、どんぐりストラップ作り、マウンテンバイク体験、スラックライン、ブルーシート滑り台等青少年の家の森でできる体験活動を準備し、実施した。
・やってみたい活動を選択して各自楽しく活動する様子が見られた。マウンテンバイクなど初めて行う活動もあったようで、何度も挑戦する様子も見られた。

（3）「のんびりタイム」（レクリエーション室・創作室・談話室・部屋）
・自己選択・自己決定をねらいとした自由選択活動として「のんびりタイム」を設定した。
・メンタルフレンドが参加者に意思を確認、または選択肢を提示し、一緒にバトミントンや卓球、バスケット、オセロ、カードゲームなどの遊びを行った。
・第１回から第4回までのふれあいキャンプでメンタルフレンドとの関係や参加者同士の繋がりが構築されているため、これまで以上に参加者同士が一緒に活動する場面が多い活動となった。

（4）「保護者懇談会」（談話室）
・保護者5名、施設職員２名、アドバイザー1名の計8名の参加で実施。
・子どもの家庭での様子や悩んでいることなどが語られ、思いを共有する場となった。

（5）活動2「スウェーデントーチ体験」

・スウェーデントーチを囲んで焼くマシュマロを食べたり、ココアを飲んだりしながら、会話を楽しむ様子が見られた。初めてスウェーデントーチを体験した参加者も多く、炎を注意深く観察する姿などが見られ、貴重な体験となった。

（6）「メンタルフレンド会議」（談話室）
・1日の子どもたちの様子や、メンタルフレンドの振り返り、情報交換の場として設定した。
・課題や困っていること、子供の成長が見られた点など、様々な視点で子どもの様子を出し合い共有することができた。
・キャンプに継続的に参加しているメンタルフレンドも多かったため、第1回からの子供の成長の様子を共有する場面もあった。

（7）別れのつどい（メンタルフレンドとのお別れの会）
・メンタルフレンドが諸事情により予定より早く大学に帰ることになったため、別れのつどいを活動3の前に行った。
・メンタルフレンドの感想発表では、活動3を一緒に活動できない残念な気持ちやキャンプの振り返り、思い出などが発表された。
・最後のふれあいキャンプになるメンタルフレンドもいたため、会の終了後には記念撮影をする様

子も見られた。

(8) 活動3「香々地屋台村」

・たこ焼き、焼きそば、べっこう飴から作りたいものを選択して活動し、作ったものをみんなに配った。
・メンタルフレンドがいなかったため保護者にも力を借りながら一緒に活動した。
・作ったものを参加者全員に配布し、昼食とした。「おいしい」「上手だね」などの声が多く聞かれ、大成功で大満足の活動となった。
・はじめはメンタルフレンドがいないことへの不安を口にする参加者もいたが、保護者や施設職員と一緒に活動する中で活動の最後にはすべての参加者が「楽しかった」と答えた。

8 事業評価

○参加者アンケート集計(対象:参加者8名)

・プログラムについて

	内　容	楽しかった	少し楽しかった	あまり楽しくなかった	楽しくなかった
①	海釣り体験	5	0	0	0
②	森で遊ぼう	2	0	0	0
③	のんびりタイム	7	0	0	0
④	スウェーデントーチ体験	5	2	0	0
⑤	香々地屋台村	7	0	0	0

・自分の事について

	内容	できた	少しできた	あまりできなかった	できなかった
①	積極的に取り組む事ができた	7	0	0	0
②	MF や友達と話ができた	6	1	0	0
③	キャンプを楽しむことができた	7	0	0	0
④	まわりの力をかりずに活動できた	6	1	0	0

○メンタルフレンドアンケート集計(対象:メンタルフレンド15名)

・参加前と後での変化について

	内容	4(変化大)	3	2	1(変化小)
意欲	活動に最後まで意欲的に取り組んでいた。	7	1	0	0
コミュニケーション	MF や仲間に積極的に取り組んでいた。	5	2	1	0
自己肯定感	活動に主体的に取り組んでいた。	7	1	0	0
自立	MF や大人の力を借りずに活動できた。	5	3	0	0

○IKR アンケート調査集計(対象:参加者10名)

「生きる力」の変容(得点範囲:28〜168点)

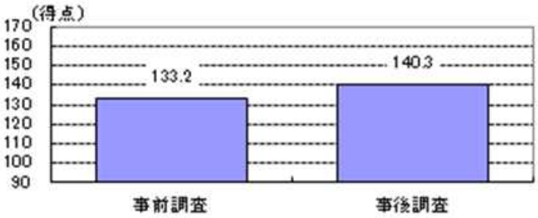

図1. 「生きる力」の平均値の推移

(事前－事後)
・事前から事後にかけて 7.1ポイント向上
・その向上に有意差は見られなかった

「心理的社会的能力」の変容（得点範囲：14～84点）

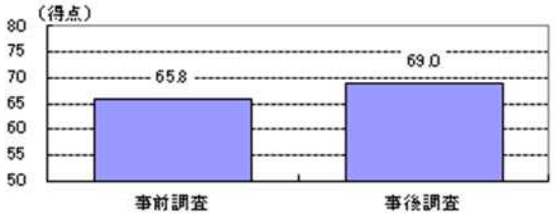

図2. 「心理的社会的能力」の平均値の推移

（事前－事後）
・事前から事後にかけて 3.2ポイント向上
・その向上に有意差は見られなかった

「徳育的能力」の変容（得点範囲：8～48点）

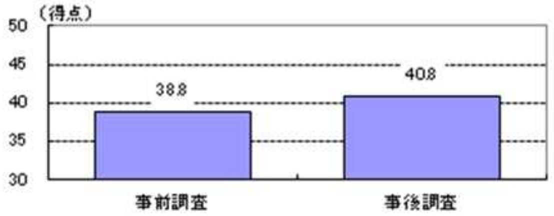

図3. 「徳育的能力」の平均値の推移

（事前－事後）
・事前から事後にかけて 2.0ポイント向上
・その向上に有意差は見られなかった

「身体的能力」の変容（得点範囲：6～36点）

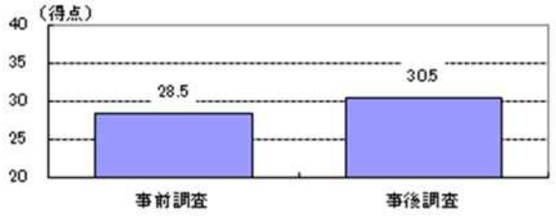

図4. 「身体的能力」の平均値の推移

（事前－事後）
・事前から事後にかけて 2.0ポイント向上
・その向上に有意差が見られた

2 成果と課題

(1)成果

・全活動について参加者全員が楽しかったと回答しており、活動の全てにおいて満足度が高いキャンプとなった。「香々地屋台村」では、自分の食べ物を作ることに加え、他者のために作る活動も取り入れた。参加者が「おいしかった」、「上手にできた」等、互いに褒め合う姿が見られるなど、参加者の満足感を高め自己肯定感をの向上につながる活動となった。

・前回に引き続き「のんびりタイム(自由選択活動)」での満足度が非常に高い。不登校または不登校傾向にある子どもにとって、自己選択・自己決定を促す時間となり、参加者の横のつながりをつくる機会として重要度の高い活動である。今回は5回目のキャンプということもあり、参加者同士が一緒に活動する場面がこれまで以上に多く見られるなど、各々の人間関係がうまく構築され、交流を深める様子がうかがえた。

・メンタルフレンドによる参加前後の変容についてのアンケートによると、前回に続き自己肯定感に関する変容が大きかったことが分かる。海釣りやスウェーデントーチなどの初めての体験をやり遂げる経験が自信につながり、自己肯定感の向上につながったと考える。

・別れのつどい終了後にはメンタルフレンドと参加者が記念撮影を行うなど別れを惜しむ姿があった。参加者の気持ちに寄り添い、受容的態度で接してきたメンタルフレンドが参加者に好影響を与えるとともに大きな存在であったことが分かる場面であった。

<IKR アンケートの分析 ＞

・生きる力の変容は平均 7.1pt向上しており、特に心理的社会的能力の変容については平均 3.2ptと最も向上した。前回に続き成功体験を積み重ねることができる活動(かかぢ屋台村等)を取り入れたことやのんびりタイムでこれまでに構築した関係を活かして参加者同士がつながりを深め、共に活動できたためと考えられる。また、子供の特徴を理解するとともに主体性を尊重し、自己決定を促すかかわり方を継続して行うメンタルフレンドの存在も大きい。

（2）課題
・今回は活動 1 を選択制とした。自己選択・自己決定を促す目的で行い効果はあった。活動により参加者数の偏りが生じる可能性があるため、少人数でも満足できるよう活動の工夫が必要である。
・居場所を必要としている児童生徒に対して、本キャンプをはじめとしたふれあい広場の取組の広報の工夫が必要である。新規参加者を増進するために、こまめにメーリングリストを活用した周知や募集を行っている。引き続きトライアルデーやふれあい活動日についても PR を強化し、青少年の家の魅力を発信しながら新規参加者の増進を図っていく。